In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	第 19 回 FD 研究会 ： 全体討論のまとめ
Author	西垣, 順子
Citation	大阪市立大学大学教育. 19 巻 1 号, p.89-96.
Issue Date	2022-03-31
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20220318-006

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

■ 全体討論のまとめ

第19回FD研究会　全体討論のまとめ

西　垣　順　子
大学教育研究センター　教授

はじめに

全体討論は、前半の報告を担当した橋本副学長、鈴木副学長、飯吉学長特別補佐（いずれも大阪市大）に加えて、大阪府立大学の高橋副学長と西田副学長にもご登壇いただいた。冒頭で司会（西垣）から、前半の報告に加えての説明があった。続いて高橋副学長と西田副学長からコメントをいただき、そのコメントおよび質問フォームで参加者から寄せられた質問に橋本、鈴木、飯吉の3名が回答するという流れで進行した。

１．司会（西垣）から説明

まずは司会から、前半の報告の補足をかねて2点紹介したいと思う。

まず、第19回FD研究会は「教育カンファレンス」を兼ねて実施した。教育カンファレンスは、市大のAP事業の事後企画として、学生参加型で教育について議論するというもので、在学生や卒業生の参加を考えていた（ホームカミングデーなどに開催することを想定していた）。しかしコロナ禍の中でそのような開催が難しいこと、8月の平日の昼間に開催するFD研究会に直接参加してもらうことも難しいことを考慮して、市大AP事業でのイベントに参加するなどの形で縁のあった学生（卒業生を含む）にアンケートをした。第19回FD研究会にも参加できると伝えてあったが、参加希望はなかった。アンケートの内容は、大阪市立大学の教育経験についての満足度（5件法）とその理由、およびOCU指標についてどう思うかであった。在学生3人、卒業生2人から回答があった。

在学中の学生は、満足度は４または５を選んでくれており、「共通教育で幅広い授業が受けられてよかった」、「様々な最先端の分野についての講義が受けられてよかった」ということを理由に挙げていた。OCU指標について回答をしたのは1人だけだったが、「履修の際に参考にしている」との回答があった。

卒業生のうち一人は、「社会人入学だったが、学生さん達と楽しく過ごせてよかった」と書いてくださっていた。もう1人は学士課程と博士前期課程は市大で、後期課程は他大学に行かれた方で、「学部時代から熱心に指導していただき、研究水準も高くて今も感謝してます」と書いていただいた一方で、もう少し研究環境を充実させてほしいという、厳しい指摘もされていた。例えば、アクセスできる文献が限られる、ネット環境やソフトエアの利用環境、研究に使える備品などが不自由なこともあり悔しい思いをしたとのことで、「一修了生として今後の研究環境の充実を心から願っております」と書いていただいた。

2つ目は部局FDについての若干の補足で、全学FDとの違いとして次の2点があげられるかと思う。1つは、学生と一緒に何かをするというケースが多いことである。学生が身近にいるからかと思うが、例えばオープンキャンパスの企画内容を一緒に考えながら、教育のことも振り返るといったことである。２つめは、教員の研究力の向上に関するものである。研究力と教育力は不可分だが、研究活動の実際は専門によって相当に異なる。全学FDでも、女性研究者支援室と共同で教員の評価のあり方についてのセミナーをやったりしたこともあったが、どちらかというと各部局のほうで、外部資金獲得や若手研究者育成といったテーマで、FDをやっておられる。

２．高橋副学長からコメント

簡単に自己紹介すると、現在私は大阪府立大学の副

学長で、統括という名目になっていて、基本的には教学全体を見る立場で、主に入試、教務、計画、評価を担当していて（市大の）橋本先生と似ていると思う。ここ十数年、大学の執行部で大阪府立大学のほうの教育と入試の責任者のような立場を続けてきている。また高等教育開発センターの立ち上げからやっていた。市大のように伝統ある組織ではないが、市大の大学教育研究センターとも共同事業等もやってきたし、いろんなことを一緒にやってきたという経験を持っている。市大の先生方にどの程度知られているかはわからないが、今、新大学に関する教務と入試の準備委員会等の委員長を務めているので、執行部の先生方には名前ぐらいは知っていただいてるかと思う。

【OCU指標について】 本日は橋本先生から、経済学部のGP事業であったPE指標の話、そしてOCU指標につなげてAP事業の話、そして市大のFDの説明をいただいた。ただ私は、AP事業の外部評価委員もしていて、事業の内容等をよく知っているので、特に新しく何かということはない。少し変わったことを言うと、2011年くらいかと思うが、PE指標でGPを取られたとき、河合塾のFDセミナーか何かで、経済学部の中村健吾先生が報告をされたことがあった。その頃に溝上慎一先生から、「市大、結構すごいことをやってるよ」という話を実はお聞きしていて、こんなことをやっている先生がいるんだと思って見ていた。この話は今回初めてするので、橋本先生もご存じないかと思う。

PE指標は本当によくできていた。学部の先生たちがどんな人材をつくるのかを真剣に考えられて、プラクティカル・エコノミストという到達目標像を掲げて、そのための能力を６つに定めて、カリキュラムでそれぞれの能力をどう身につけていくかを整理してから指標ができている。そこがすごくいいなと当時から思っていた。

OCU指標は、全学のものなので汎用的にする必要があり、難しいところもあったと思う。（PE指標を作った頃はDPやCPという用語がなかったと思うが、）今風で言えば、DPを達成するためのCPをどうするかという議論に十分な時間を費やした後に、指標をどう作るか、対応する能力をどう定めるかということを決めていく必要がある。これはどの大学でも非常に難しいところで、全学的に一斉にやるのはなかなか難しいと思う。AP事業の中では、OCU指標は開発途上または発展途上で、学生の学年進行に合わせて開発と利用可能性の拡大を進めていくという状況だったと思うが、新大学ではそのあたりも踏まえてもう一度全学的に考えていくという話を、橋本先生ともさせていただいている。

【FD・eポートフォリオ・IRコンソーシアムについて】

市大は昔から、いわゆる草の根FDのところから伝統があるが、府大は2005年に高等教育開発センターができて、ある意味でそこからFDという言葉が全学に浸透したような状況なので、状況は大分違うとは思う。だから市大はいろんな取り組みが部局で行われているが、府大はセンターを中心にいろんなことが動いてきていると思う。学長予定者の辰巳砂先生の話にもあったように、両方でしっかりやっている良いところを生かして、新大学でうまくつなげていければと、それぞれを発展させてより良いものにしていければと思っていた。

今日の話を聞くと、本当は府大も、市大の先生方に府大でやってきた中身などを紹介しないといけないと思った。しかしこれから企画をする時間が、恐らく新大学に向けても厳しいかと思う。そこで宣伝で申し訳ないが、認証評価機関でもある大学基準協会が出している「大学評価研究」という雑誌があり、その20号に原稿を頼まれて「大学の『学習成果』を再考する」というタイトルで論文を寄稿した。その中では府大の内部質保証の話を、学習成果をどう把握するかという内容で書かせていただいていた。大学評価研究所がやっている公開研究会（11月22日）でも話す予定なので、ご関心がある方はぜひ参加していただければと思う。府大の、特に学習成果の把握と内部質保証の話をさせていただこうと思っている。もう一人の報告者は溝上慎一先生なので、私の話だけでなくても聞いていただく価値はあると思い、宣伝させていただいた。

府大の特徴としては、学生調査とかｅポートフォリオを全学で長く行ってきており、データの収集をずっと行っているところかと思う。例えば卒後５年後の卒業生の調査を継続的に行っている。いろんな間接評価

のデータを使って学習成果の把握をやってきているところが、特徴かと思う。

大学IRコンソーシアムという共通の学生調査をやる団体を、ずっと主導的にやってきた。今は60大学が参加し、学生調査も４万人程度が毎年回答している。１学年で４万人なので、２つの調査で10万人ぐらいが参加している。新大学ではこれらの成果も生かして、教学IRも進めていければと考えている。

３．西田副学長からコメント

私は大阪府立大学の副学長で、共通教育の担当、高等教育推進機構の機構長も務めている。新大学では、今度新しくできる国際基幹教育機構に関わることになっている。また図書館ワーキングで座長をしていたり、社会貢献のワーキングにも出ていたりしているので、生涯学習の方面にも関わっていくと思っている。ひょんなことから高等教育推進機構長という、共通教育を担うところの長になってしまったが、そういう役職になってから、本日お話しいただいたようなことを考え始めた、または「考えないといけないな」と意識づけされたので、きちんとしたコメントができるかどうか…と思っているが。

【全学の教員の協力に基づく教養教育】 鈴木さんのお話は、基本的には市大でどんなふうに共通教育を動かしておられるかという話だったと思う。府大には高等教育推進機構という組織がきっちりあるので、その教員が中心になっている。新大学では国際基幹教育機構ができるので、そこに市大の先生方にも入っていただいて、そこが中心になって共通教育を回していくことには変わりない。ただ科目数が、そこの教員だけでは当然回せないので、全学協力で授業担当をしていただく必要がある。本日お示しいただいた市大の教務委員会などを上手に取り込む形で、新しい国際基幹教育機構としては、科目委員会に機構の教員と、他の部局の先生方にも入っていただいて、科目を上手に回していきたいと考えている。

ただ、先ほども言及されていたが、教養を教えることが負担だと思われる先生方も少なくないと思う。教養の科目と専門の科目の間には隔たりのようなものがあるという気が、（今はもう、そのようなことは随分なくなってるような気が私はするが、）やはりあるのかと思う。教養科目は、何か特別なことをしないといけないのかという点については、いろんな考え方があると思うが、基本的にはそうとは限らないと思う。もちろん1-2年生向けなので、分かりやすく説いていただくといったことは必要だと思う。しかし、「分かりやすい易しいことを話してください」とお願いしているわけではない。

先ほど学長もおっしゃっていたが、やはり大学なので、教員は最先端の研究に研究者として触れている。結果的には「生物学の基礎」といった教科書で教えるかもしれないが、普段触れている最先端の研究を反映していくというような教養教育を、今度の国際基幹教育機構の教養教育はそのようなものとして成り立っていければと思う。

私が大学で授業を受けていた頃は、教養を教えるのは教授でないといけない、別の言い方をすれば、「准教授や講師ごときに教養の授業が教えられるか」みたいな雰囲気もあった。それは取りも直さず、研究者として大成したところに初めて教養の授業があることだった。今はそんなことでもないかもしれないが、研究と切り離れたところに教養の授業があるのではやはりない。レベルを下げて特別な授業をしてほしいということでは、決してない。これが教養に対する正しい考え方なのかは分からないが、そういう考え方で、全学の教員の皆さんに協力していただけるように、これからお願いしていくのだろうと感じていた。

実際にはどの部局もそれぞれに忙しいので、「コマの負担」ということになってしまうが、本来はそうではなく、教養を教えることの価値といったことを、少しでも考えていただけるように変わっていければと思った。

【副専攻のあり方】 もう１つが横断型の副専攻を含めたことのお話だった。府立大学と市立大学、それぞれの副専攻で共通しているものもたくさんあるが、やり方などいろいろと違っていて難しい。新大学に向けて、合わしていかないといけない部分がある。２キャンパス時代は比較的、今までやってきたものをそれぞれ発展していくような形でやり、2025年に森之宮に1-2年生が基本的に集結することになれば、新しい形で副専

攻を考えていかないといけない。いろんな先生方の協力を得ながら、ということになるだろう。

よい例かどうか分からないが、学生に副専攻の意味を説くときに、２つぐらい例を挙げる。１つは一輪車と自転車みたいなものだということ。１つの専門をぐるぐる回していることは、もちろん大事で（それによって）どんどん深まっていくが、やや不安定でうまくいかないことがある。もう一つ視点をつくって、二輪車・自転車の形にすると、２つの輪が回って、ぐるぐる往還していく形になる。そうすることによって安定したり、速く走れたりする。こういう視点は必要だろうと思っている。

実は私の専門は古典だが、中心が畿内だけにあったときに比べて、鎌倉に新しい幕府が開かれて、そことの往還が始まったところで新しい文化が開けた。また、江戸幕府が開かれて、京と江戸という２つの中心を期せずして持ったことによって、いろんなことが発展していった。新大学ではいろんなことを望まれているが、副専攻のそれぞれで何をするかも大事だが、副専攻を履修することによって学生には、２つの視点、複眼的な思考ができるようになってほしい。また、副専攻という形では履修をしない学生にも、そういう科目を開設することで、学びが広がればと思う。

さらに、１つの専門でも全く１つではない。１つの時代なり文学なりを深く広く分かろうと思えば、それだけでは十分ではない。私は和歌を中心にする研究者だが、和歌だけではなくて、その和歌の享受されてきた過程などを知ることが、結果的にはより深くいろんなことを知ることになるので、専門においても２つの視点みたいなものを持つことが必要だと考えている。そういう意味では、副専攻的な考え方というのは新大学でも重要だと思う。ただこれを、具体に展開していけと言われたら、大変難しいところもあり、これからの課題になる。そんなことを思いながら鈴木さんのお話は聞かせていただいた。

本日にお話しいただいたところは、新大学に向けて課題がたくさんあるところだが、学長も言われたように、よいところを上手に取り込みながら、折り合いをつけながら、進めていければと思う。今度、機構長には橋本さんが就かれるので、府大、市大ということではなく新しい公立大学として、教養教育を考えていかないといけないと思っている。

４．司会によるまとめ的応答と参加者からの質問の紹介

高橋先生からは、いろいろな観点から多角的にコメントをいただいた。OCU指標もAP事業の申請書の中では、ポートフォリオにつなげていく、または「ポートフォリオの簡易版だが、これから育てていく」という位置づけだった。府大のｅポートフォリオについては、市大で開催したシンポジウム等でも何度かお話を伺っており、新大学でも導入されるので、学生さんに広く使っていただけるように、我々も一緒にやっていけるといいと思う。

OCU指標に関しては府大の参加者の方からご質問をいただいており、後で橋本文彦先生に答えていただければと思っている。「六角形はどうやってつくるのか」、「学生はどうやって自分の状況を確認できるのか」、「自分の状況確認以外で、他に活用の方法はあるのか」という質問がある。

西田先生からは、教養教育や副専攻の、特に学生から見ての意義を話していただいた。ちなみに、私は大阪市立大学に着任したのが2006年だが、そのときの副学長が文学研究科出身の方で、「文学研究科は以前は教授でないと教養教育を任せなかった」と言っておられた。その後、教員数の２割削減などもあり、今はもうそんなことを言っていられない状況もあり、他方で学生さんは若い先生も好きというところもあり、現在は形はだいぶ変わっている。両大学とも教養教育を大事にしてきた一方で、そうは言っても教員も体が１つしかないので、どうやって教養教育を展開していくか、いろんな課題もあるのかと思いながら聞かせていただいた。

この後に、橋本・鈴木・飯吉先生からコメントへの応答をしていただくが、フロアからいただいている質問にも併せて答えていただければと思う。先ほどのOCU指標についての質問の他に、飯吉先生に対して教育実践事例WEBデータベースと学びのTipsについて詳しく教えてくださいという質問が来ている。

５．橋本副学長からの応答

【OCU指標について】 OCU指標の六角形のつくられ方は次のようになる。まず科目ナンバリングで同じナンバーのついた科目群ごとに、学修成果となる能力を配分する。科目群αでは、論理的能力、コミュニケーション能力、調査能力などが、ほぼ均等に身につくとすると、均等に数値を配分する。他方で、科目β群では論理的能力やコミュニケーションは到達目標として重視されないが、調査能力がたくさん身につきますという場合、学修成果の能力配分を、例えば１対１対３対１対２といった不均等な形で配分をしておく。さらに科目群γでは、またそれとは別の成果配分であるとする。あらかじめ科目群ごとに、それぞれの身につく能力が１対１対１対１とか、１対１対３対１対２とか、それぞれに数値を振っておく。

次いで、学生が科目を取って試験を受けると、教員は採点して成績認定をする。例えば科目群αの授業で、学修成果配分値が「１対１対１…」だったものを、ほぼ満点に近い点数で単位を取得すると、そのまま点数が積まれる。科目群βの科目は、もともと学修成果の配分も違うが、学生の成績も低かったとすると、その点数に応じて学習成果配分値の全体がぎゅっと小さくなった数値になる。γも同様に、その科目を履修して取った成績ともともとの配分に従って、身についた能力を示す数値が算出される。そして、これらの点数を積んでいくと、六角形のレーダーチャートが描かれる。

ポイントは、PE指標のときはこの六角形が満遍ない形になっていると良かったが、全学の指標になると、すべての学部でそのようになるわけではないということである。学部や学科によっては例えば、「コミュニケーション能力もプレゼン能力も高くないが、論理能力が非常に高い人を育てたい」ということもあるだろう。もちろん大学全体として、最低限はないといけないが、最低限さえできればあとは、そうではない人を育ててもいい。

学生によっては、自分はこういう業界に進みたいから、そのために必要なのはこういう能力なんだということで、自分はそこを目指して頑張るということもある。個々の学生から見て、「なりたい職業、業界に行くために、どういう能力を身につけたらいいか」を考え、「１年生の今、２年生の今、私に足りてないのは何か」を把握して、次に科目を履修するときに、その部分の配分値が小さい科目を取っても力が伸びないので、科目ナンバーを参考にどの科目を取れば自分がなりたいものを目指していけるか、OCU指標が自分の目指したい形になるかを考えて、学修を進めていくというものである。

また、各学部・研究科にとっては、カリキュラムの点検に利用できる。全学生の平均を取ったときに、「うちの学部この能力を特に重視しているのに、学生は全体的に満遍なく取っている」という状況があるなら、カリキュラムを変更しないといけない可能性がある。それぞれの学部が目指している方向と、学生が個々に目指しているものがあるが、お互いに自分の現在の状態を確認しながら、次にどの科目（どういう学修成果配分の科目）を取ればいいかを考えたり、あるいは「こういう科目をもっと提供しないといけないな」とカリキュラムのあり方を考えたりする、そういうものとして設計してある。

【高橋副学長からのコメントについて】 PE指標について高橋先生に褒められたのは、初めてとは言わないが珍しいかもしれないので、どうも照れてしまうが、ありがたいと思う。おっしゃるとおり、PE指標は「こういうことをやる」ということを先に決めてから、それを示す指標として作ったが、OCU指標のほうは、それぞれの学部が特殊に持っている事柄よりは、全学での活用のために先に一般化を進めた。そのことによる問題もあり、例えば他学部の科目を取ったという場合などに、専門の科目のOCU指標の数値と本当に足せるのか等、様々な問題も出てきている。

新大学発足の機会に、今から議論してどのくらいのスピードで新しい「OMU指標」を入れるかにもよるが、改めて全学で議論させていただいて、OCU指標のときの欠点を克服したり、同時にやはり、学部ごとに全く異なる学修成果ではなく、どこかで共通性もある測り方を実現できればと思う。OCU指標を提案したときに、市大の中でも、学部ごとに比較されると困るという声も何度も聞いたが、比較したいのではない。自分たちが提供しているものが本当にそのとおりできているか、学生は自分がなりたいものに向かってうまく

進んでいるか、そういうことを調べるために役に立つような、新しいOMU指標とを今後一緒に考えていきたいと思う。実際、PE指標もOCU指標も、１人で考えて作って、こんなんどうですかって言ってやっていたので、いろんな視点、多様な視点がないままに作ってきたので、ぜひ皆さんのほうにもご議論をいただきたいと思う。ちょうど今、本学の大教センターの平先生や橋本智也先生にもOCU指標をいろいろと分析等していただいて、問題点等も大分、分かってきたところなので、それを進めていきたいと思う。

また本学では、「OCU指標を活用した学修計画」といった学修支援イベントもやっている。OMU指標になる時点で１回止まってしまうが、今年度もこういうイベントもやっている。市大の先生方で、「こんなの全然知らなかったよ」という方がいらっしゃったら、OCUラーニングセンターのほうに問い合わせていただければと思う。また高橋先生といろいろと一緒に相談させていただきながら進めていきたいと思う。

私へのコメントではないところもあるが、西田先生とも今、毎日ぐらいお会いして、新しい国際基幹教育機構のいろんなことを一緒にお願いをして回っている。市大の先生や私の所属する経済学部の先生とは教授会のときに月１回しか会わないけど、西田先生や高橋先生とはほぼ毎日会うというぐらいだが、新大学に向けて、市大でこれまでにやってきたいろんなこと、欠点も強みも両方あるが、それらを合わせながら、一緒に議論させていただければというふうに思っている。

６．鈴木副学長からの応答

私も17-18年くらい前から学部の教務委員や全学の教務担当部長や教育担当副学長という形でずっとこの問題に関わってきた。特にこの時期は大阪市の財政事情が悪く、教員の数が急激に減った中で、従来の教育を維持したり、逆にもっと充実させたりしないといけないという、かなりの難題に取り組んできたというところがある。ただ今回、新大学に向けての話で、いろいろ大変なところはあったが、大阪市からの財政的な補助も、ここ数年はあまり大幅に減らないようになり、教員の人数もある程度安定してやってきたところもあった。また新大学に向けて、教員数が今までよりも増える部局もあったりするので、そういう意味では、教育を充実する上で、チャンスな時期なのかとも思っている。

今回、府立大学で全学共通教育に関係した先生方に、かなり入っていただく形にはなるが、気を緩めると、つまり各部局からの協力が一度弱くなってしまうと、またそれを立て直すのは大変だ。できるだけ各部局に、全学共通の基幹教育に関してしっかりとやってほしい。西田先生が言われたように、考え方によると思う。私は商学部の教員で、自分の専門は産業立地論で、それに関連した講義や演習とかは昔からやっていたが、学部として現代GPを獲得しないといけないということで、1-2年生向けの新しい授業をつくったり、全学的な授業協力をしたりした。大変は大変だったが、複数の教員がオムニバスでやったりして協力すると、私自身も新しい発見があった。自分だけで講義や演習をやっているのと違い、複数の教員が協力して授業プログラムをつくるというのは、結構面白く楽しい面もあり、しんどいけれども、自分の教育スキルが上がったと思う。単に勘違いかもしれないが、教育スキルが上がったような雰囲気になった。先生方にはご自分の専門の研究を踏まえながらも、基幹教育という、大学全体の教育を担っていることを、ある意味で楽しんで参加できるような仕組みができたらいいと思っている。

７．飯吉学長特別補佐からの応答

【高橋副学長からのコメントについて】 高橋先生のお話に２点補足と、西田先生に１点、考えたことをお話ししたい。まず１つ目のOCU指標については、先ほど橋本先生から詳細をご説明いただいたが、OCU指標自体は、学生の学力の点検の指標でもあるが、それを使ってカリキュラムの点検もできるところが面白いところである。全学共通教育のところだけを見るとか、専門のところだけを限定して見るといったこともできる。市大ではようやく全学にOCU指標が広がったところで、その今、新大学への移行に合わせて中断せざるを得ないのは残念ではある。OCU指標が全学に広がったところで、大学教育研究センターの平先生を中心に、学部ごとの学生たちの平均値や、最高値や最低値も出していただき、教務委員会などを通して各部局にデー

タをお渡ししていて、部局のカリキュラムの点検や、学生が学修成果を達成しているかどうかの点検に使っていただけるようにしている。機関別認証評価を来年度に受審することもあり、各部局でのカリキュラム点検のスキーム、システム、体制ができてきた中で、OCU指標は結構使えるのではないかと理解していただき始めているところである。橋本先生の大変すばらしいアイデアに基づいて開発された、汎用性もあって多様性も表現できる、便利な良い指標だと思っているので、新大学でも議論を深めて、活用していただける形で準備していけたらと思っている。

それから全学FDについてだが、全学FDは、部局FDが活発になったので縮小したというわけではない。かつては日常的なFDの企画も含めて、全学FDの企画を我々が考えていたのだが、部局のFDの中で、日常的な教育実践に関わるところはかなり実施されるようになった。現在は、部局FDの状況も全学で把握し合って確認した上で、必要な内容は、全学FDの企画として拾う形になっている。全学で議論しておいたほうがいいこと、みんなで知っておいたほうがいいこと、考えたほうがいいことを、全学FD委員会などで情報をやり取りしながら、企画していけるようになった。より組織的にFDを企画できるようになった、ということかと思う。府大さんで実施しておられる企画とうちでおこなっている企画はそれぞれに少し違っているが、先ほど高橋先生もおっしゃったように、両方のいいところを取り入れながら、それぞれの得意な分野も取り入れながら実施していけたらいいと思った。

【西田副学長からのコメントについて】 西田先生のおっしゃっていた、「教養教育は教授でないと教えられない」というのは、大変に共感するところである。私が学士課程時代に学んだ大学も、そういう考え方だったし、だから教養の科目は大変に面白かった。自分の専門分野を良く知っているだけではなく、自分の専門を中心にしながら、その分野の全体像をよく理解して、その全体像を分かりやすく専門外の人間にも話せるためには、その分野の大家として相当の知識と能力がないといけないのだ、と学部当時に思った覚えがある。市大には、新制大学創設期から、教養部はあったが教養部専門の教員がいないという形で、戦後一貫して通してきた。教養部を持って、そこに所属の先生がいたという大学が大半だと思うが、初代学長の恒藤恭がそのあたりはこだわっていたようでもある。専門性に立たないと一般教養というものは教えられないという認識が、強くあったと思う。そういう伝統が市大には長年あった。教員数が減ったりするなど様々なことがあって、少し崩れてきているが、私は良い伝統ではないかと思っている。

このあたりのことについては、アメリカの高等教育学者のボイヤーという人が、大学教員の4つの学識、スカラーシップということを述べていて、「教育と研究」はもちろん軸であるが、それ以外に「統合と応用」という力も最近は必要になってきているという主張をしている。「統合」というのは、幅広い知の体系の中に特定の知を位置づけることの出来る力である。例えば、その分野の入門的な教科書を、きちんと書ける力と言ったら分かりやすいかもしれない。そういう力が、大学教員には一層必要になってきている。大学がユニバーサル化する中で、学習意欲が低かったり、その分野に全然興味を持ってない学生にも教える場合が多くなっているという意味で、より高い能力が必要になっている。そういう議論が1990年代半ば頃にあり、全世界はスカラーシップという考え方に合わせて、教員評価のあり方なども変えてきたという歴史があったりするが、そういうところとも合致する話なのかなと思っている。「より高い能力を要する教養教育」という認識をきちんと理解していただけると、どこかだけに任せておけば良いのだということではなく、「それぞれの学問の専門性に立って、総合大学としての良さを表現できる教養教育」というものを、皆様と実現できたら良いと思いながら伺っていた。

【教育実践事例WEBデータベースについて】 教育実践事例WEBデータベースは本学内のみで閲覧できるようになっていたが、既に府大さんとは法人統合し、新大学も認可されたので、府大の皆様にも見ていただけるようにIDやパスワードを共有してご利用いただければと思う。本学の教員に対する調査で収集した教育実践事例を分類整理したデータベースで、カテゴリー分類のボタンからでも見ていただけるが、フリーワードで検索していただくこともできる。また、効果のあっ

た事例だけではなく、効果がなかった事例も入っており、どんな実践が有効であったのか／なかったのかも分かるようになっている。各事例の授業形態（講義か演習かなど）の情報も付いている。他に、アクティブ・ラーニングを採用しているかどうかというフラッグもつけている。

去年から、遠隔授業に関するものも追加していて、「#遠隔」と書いて検索していただくと出てくる。次に教員の調査をやるときにも、こういう事例を書いていただく項目を設けて、さらに事例を増やしていきたいと思っている。

【学びのTipsについて】 ラーニングセンターのホームページから、「学びのTips」というタブを押していただくと見ることができる。現在は市大のポータルの中に所蔵していて学内限定になっているので、府大の先生方にはまだ内容は見ていただけないが、Tipsのリストは見ていただける。新大学になれば、府大の先生方にも見ていただけるし、活用していただけると思っている。

例えば、OCU指標について学生にも分かりやすく説明するTipsもある。他に「先生への質問とか相談の仕方」といったものもある。これは新入生への入学手続の書類と一緒に入れていたりする。実際に学生から、「先生にどうやって質問したらいいんですか」「そもそも先生に質問していいんですか」などの質問がラーニングセンターにあったので、こういった内容のものを作ったほうが良いだろうということになった。また、レポートの書き方に関連してもいろいろ作っており、例えば「文献を読む×文献カードを書く」といったものもある。特任教員が中心に作成し、TA・SAにも学生の目線で意見をもらったりしながら作っている。

数学編も作っている。自学自習のための教材ということで、博士研究員＝博士号を持っている数学・物理学分野の大学院修了後の相談員の方々が、相談のない空いている時間にどんどん充実したものを作ってくださっている。理解度チェックシートといったものもある。

８．まとめ

【司会（西垣）】 ２つの大学が一緒になるが、それぞれにカルチャーも違っていたり、使っている言葉の意味もやはり少しずつ違っていたりするところもあるかと思う。しかし、学生にどう学んでほしいか、どう育ってほしいか、そういうところから話をしていけば、可能性が開けていけると思っている。そういうことを今後とも、いろんな機会を捉えて互いに話していければよいのではないかと思う。本来であれば、ここでご登壇いただいた方に一言ずついただくところだが、時間が押しつつあるので、ご登壇いただいた先生方で、特に高橋先生と西田先生を中心に、「これは言っておこうかな」と思う方は、おっしゃっていただけたらと思う。

【高橋】「新大学に向けて」ということは、どこかで何か企画したほうがいいかと思う。これまでやってきたことで、ここは継続しましょうとか、こういうのを新大学でやっていきましょう、どうやってやりましょうかという話をしたり、意見を聞く機会があると良いかと思う。

【橋本】いろんなご意見があると思うので、我々からの報告だけではなくて、様々な先生のご意見を伺う機会があればと思う。どちらかというと大学の本体は、（学長副学長ではなく）教職員の方々なので、そういう皆さんの意見を伺う機会があればと思う。

【司会】今後とも全学FDを考える際には、その辺も検討して行ければと思う。本日はここで終了としたい。ご登壇いただいた先生方、ご質問をいただいた参加者の皆さん、ありがとうございました。